

評定競技領域における運動表記について

吉本 忠弘¹⁾

I. はじめに

本研究は、評定競技領域（金子, 2005a, p.231）に属している体操競技における技の表記に関する問題性とその解決に向けた示唆を得ることを目的とする。これにより、評定競技領域における技の表記の重要性を再確認し、運動表記論の研究の推進を願うものである。

II. 問題の所在

評定競技領域は、「演技の価値構造」と「技術的完全さ」という二大評定領域を有している（金子, 2005a, p.245）。評価の対象となる演技は「個技」によって構成されるため、採点の際に審判員は「選手が行った技」の価値を即座に判断し、その出来栄えに相応しい評価をしなければならない。したがって選手にとっては個技のトレーニングが不可欠となり、また審判員にとっては個技の正確な評価は資格取得の最低限の条件になる。

このようなことから、この領域においては選手と審判員の間で評定の対象となる個技が「どのような条件が揃った際に成立するのか」を共有しておかなければならない。この際、競技関係者が技の運動課題を把握する際に最も頼りにするのが、採点規則集であろう。

たとえば、体操競技の採点規則集においては「技の

表記」、「難度」、「挿絵」が記してある。採点規則集における技の表記は、世界中の競技関係者が参照するため、金子が述べているように「技のもつ課題性に基づいて命名され、その技の機能面はたえざる技術改革に対応できるように、技名によって運動経過をしばらないようにしなければならない」（金子, 1974, p.44）。しかしながら、近年の採点規則集においては「協定語」（金子, 1974, p.41）のみの表記、技の技術が技名に含まれているもの、さらに運動構造上まったく異なる技が同じ枠の中に入れられているもの等が散見される現状である。これまで技の表記に関する研究は、特に規定演技において提示された技を中心に行われてきた（金子, 1974, p.43）。

しかしながら、アトランタ・オリンピック（1996）を最後に規定演技が廃止され、今日では、技の表記に関する研究は、技の技術分析に関する研究と比べて大きく後れを取っている。技の課題性を明らかにすることなく、公式文章として不明確な表記が用いられたなら、競技関係者の間で技の課題性を共有できなくなる。こうした事態が、採点やトレーニングの場に大きな支障をきたすことは明らかであり、このような状況は、早急に解決をしなければならない。

本研究では以下、「協定語」のみで表記されている技の表記について検討する。ここでは男子体操競技のゆか運動において「ブレイクダンスの変形」（図1）と呼ばれている技を取り上げることにする。

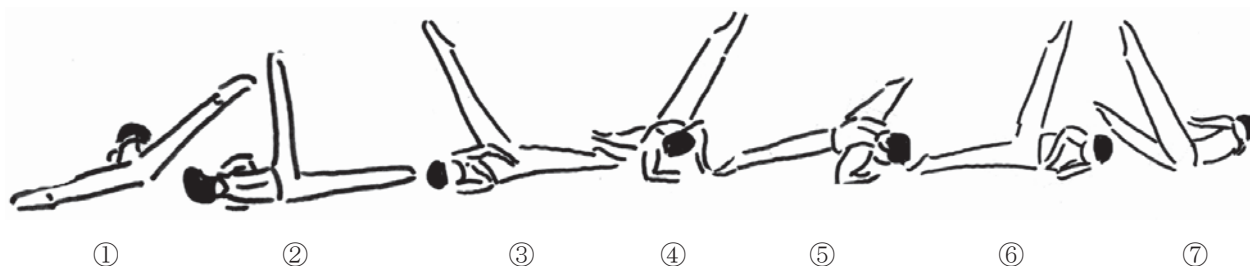


図1 「ブレイクダンスの変形」と表記されている技

1) 北海道教育大学釧路校

Ⅲ. 「ブレイクダンスの変形」の表記に関する検討

1. 「ブレイクダンスの変形」の現状

「ブレイクダンスの変形」は1989年版採点規則から今日に至るまでA難度の価値が与えられている(F.I.G., 1989, p.44; F.I.G., 2009, p.42). この技が国際競技会で発表された正確な時期は定かではないものの, 1985年に開催されたNCAAにおいてUCLAのピネダが実施(Cahoy, 1985, p.24)している. さらに, 同年に開催された世界選手権モントリオール大会(1985)ではヘレウス(CUB)が「ブレイクダンスの変形～開脚頭倒立1回ひねり(支持をせずに)を実施している(日本体操協会, 1986, p.2). 近年では, シドニーオリンピック(2000)の個人総合チャンピオンであるネモフ(RUS)が「開脚旋回～ブレイクダンスの変形～開脚旋回」という組み合わせを実施した(図2). このように, 「ブレイクダンスの変形」は今日まで多くの選手によって実施されているだけでなく, 他の技との組み合わせも発表されていることが分かる. しかしながら, 採点規則上の表記から分かるように, 今日に至るまで依然としてこの技の運動課題に関する検討はなされていない. すなわち, 「ブレイクダンスの変形」は技の成立に必要な条件について検討されることなく, A難度の価値を与えられ続けているのである.

2. 技名の検討

「ブレイクダンスの変形」の新たな表記を提示する前提としてここでは, 技の構造体系論的立場(金子, 1974, pp.176)から, この技の運動課題を明らかにすることを試みる. 金子は技の構造分析の視点として運動形態的構成要素と運動技術的構成要素の二拠点を挙げている(金子, 1974, p.177). 以下では, 上述の分析拠点から「ブレイクダンスの変形」における運動課題を明らかにするために, 運動形態的構成要素の視点から考察する.

(1) 運動形態的構成要素からみた「ブレイクダンスの変形」

技の課題性を明らかにするための分析拠点である運

動形態的構成要素は, 体勢変化要因と姿勢変化要因に分けて考察することができる(金子, 1974, pp.177).

ここでは, 上述した二大要因において「ブレイクダンスの変形」の構造分析に関連の深い視点から分析を試みる.

a) 運動面

図1より腰の曲げ伸ばしや開脚など様々な動きがみられるものの, 上半身は常に水平運動面で運動していることが分かる.

b) 器械に対する身体の面

技の開始体勢から水平運動面で1周(360度)するまでの間に「正面」(伏臥)と「背面」(仰臥)が2度入れかわる.

以上のことから「ブレイクダンスの変形」がゆか運動の技の体系で「巧技系」(金子, 1974, pp.299)における脚旋回技群に属するものと考えられる. したがって, 先ず水平運動面で行われる運動の表記を確認する必要が生じる.

(2) 新たな表記の提案

a) 旋回

旋回とは, 「前と上を不変として, 両手の下を片足または両足を順に通して円運動させる技のベースとしての基本語である」(金子, 1974, p.54). ゆか運動で行われる旋回には「片足旋回」と「両足旋回」があり, さらに「両脚旋回」は「閉脚旋回」と「開脚旋回」に分けることができる.

b) 転向

「体が水平面に運動し, かつ前の方向を常に変化させて行われる技のベースをなす基本語であり, 主としてあん馬の技に多く用いられる」(金子, 1974, p.54).

「旋回」と「転向」の定義と「ブレイクダンスの変形」の運動経過を比較すると, 先ず「ブレイクダンスの変形」では開始体勢を基準として常に前の方向を変化させながら水平運動面が形づくられる. 次に, 常に上半身がゆかに接触した状態で「仰臥」と「伏臥」が繰り返されているため, 「入れ」, 「抜き」(金子, 1974, p.53)という旋回特有の動きも現れない. このようなことから「ブレイクダンスの変形」は「転向」に属す

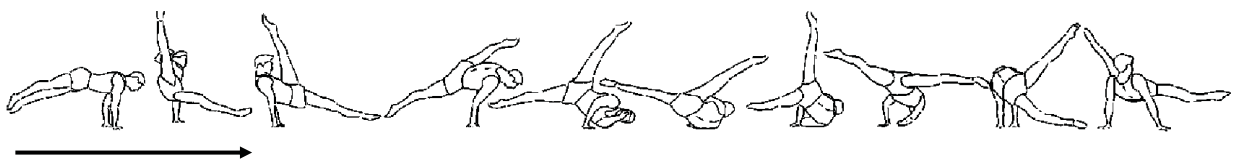


図2 「開脚旋回～ブレイクダンスの変形～開脚旋回」(シドニーオリンピックテレビ映像から作成)

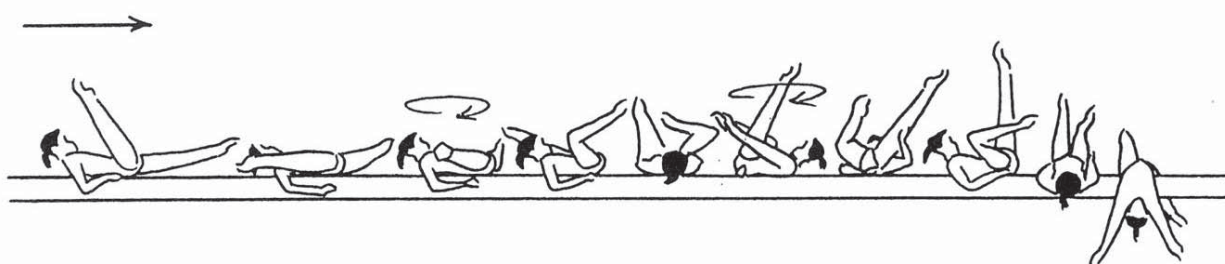


図3 平均台における「仰臥全転向」(日本体操協会, 1990, p.19から転載)

る技であると考えられる。

また、「転向」の際に上半身とゆかとの接触を本質とすることからここでは「接触転向」という新たな術語を提案する。

「ブレイクダンスの変形」においては「接触転向」という特徴的な運動経過を有していることが明らかになったが、次に、転向の際に生じる面の変化に注目してみよう。

これまでゆか運動の技では接触転向系の技の実施は報告されていない。しかし、平均台においては1990年のチャイナカップで図3のような技が発表されている。当時は専門誌において「(台に対して縦向き仰臥姿勢から)背中を台につけたままで1 $\frac{1}{4}$ 横回転(台に対して横向き仰臥姿勢まで)」と表記されていた(日本体操協会, 1990, p.19)。この技は2009年版女子採点規則において“1 $\frac{1}{4}$ turn on back in kip position (hip-leg angle closed)”と表記され、C難度の価値が与えられている(F.I.G., 2009, p.117)。同様にして2009年版では“1/1 turn to 1 $\frac{1}{2}$ turn in prone position – alternate support of hands permitted”にはA難度の価値が与えられている(F.I.G., 2009, p.117)。これら両者ともに脚や手の姿勢に関する規定詞が付されているものの、前者は「仰臥」、後者は「伏臥」での「接触転向」を動きの本質と捉えることができる。したがってこの技は「伏臥接触全転向」のように表記することが可能と考えられる。

「ブレイクダンスの変形」においては水平面に脚を回旋させながら「仰臥」と「伏臥」を入れ替えていると捉えることができる。しかしながら仮にこれを「仰臥と伏臥を入れ替えながら接触転向」のように表記すると、表記が冗長になってしまう。そのため「仰臥」と「伏臥」の入れ替えに必然的に伴う「ひねり」という規定詞を用い、「接触転向ひねり」と表記することが可能になると考えられる。

これまで運動形態的構成要素の視点から「ブレイク

ダンスの変形」の独自性に関して分析した結果「接触転向ひねり」というゆか運動ではこれまでになかった特徴的な動きを有していることが明らかになった。これが明らかにされたことで、「接触転向ひねり」という運動課題の基で、その解決に相応しい運動技術について分析をすることができる。これに関しては今後の課題としたい。

IV. ゆか運動における巧技系の体系化

従来のゆか運動の巧技系の体系(図4)では「接触転向ひねり」を含めた分類がなされていないため、ここでは「接触転向ひねり」における体系上の位置づけについて検討したい。これまでゆか運動の技の体系において水平運動面に足を回旋させる技のグループは、「支持技群」の「動的支持」に位置づけられていた。しかしながら、「接触転向系」の技においては、技の遂行に対して支持が不可欠の課題ではないためこのグループに属することはできない。そこで、図5のように「支持」「接触」を含め、水平運動面での脚の回旋を課題とする技を「脚回旋技群」として従来の「支持技群」から独立させて分類することによって、巧技系の技を新たに体系化することができる。

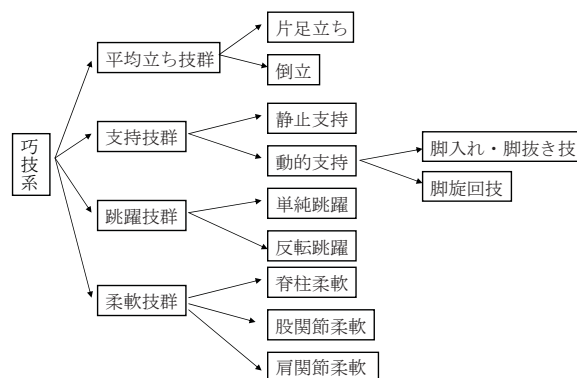


図4 ゆか運動における巧技系の体系(金子:1974)

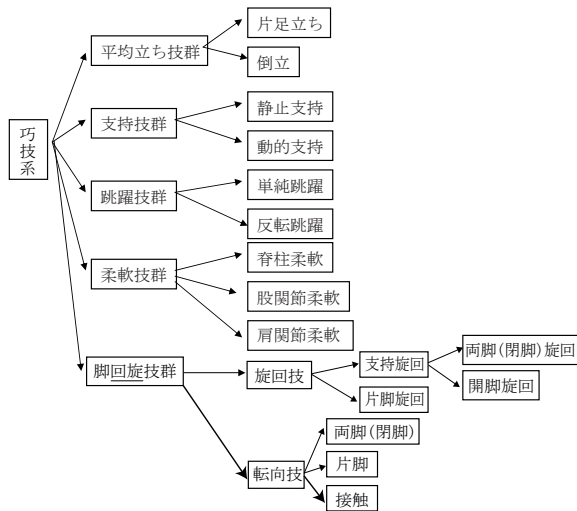


図5 巧技系の新たな体系

V. 結 語

本研究では評定競技領域における技の表記に関する研究の推進をねらいとして、体操競技において「協定語」のみでしか表記されていない技における望ましい表記について論究してきた。

渡辺は、1993年に発表した論文において「技の構造を的確に捉え、その課題や価値を明確に規定してゆく研究は、技の発生が盛んな割に日増しに立ち遅れを見せている」(渡辺, 1993, p.51) と述べている。近年

においては、新技の発生こそ稀であるものの、技の構造体系論的立場から技の課題性の把握や表記に関する研究は、依然として滞ったままである。「その技がどのような課題を有しているのか」、あるいは「多の類似した技との違いはどこにあるのか」といった技の独自性ないし課題性の把握が曖昧になれば、選手やコーチは何を目標にして技のトレーニングを行えばよいのであろうか。

技が直接的に評価の対象となる評定競技領域においては技の表記に関する研究をなおざりにしてはならない。

文 献

- Cahoy, P. (1985) OHAIO STATE WINS ITS 1st NCAA TITLE, *International gymnast*, 6:2-33.
- F.I.G. (1989) Code of Points-Men-.
- F.I.G. (2009) Code of Points-Men-.
- F.I.G. (2009) Code of Points-Women-.
- 金子明友 (1974) 体操競技のコーチング, 大修館書店:東京.
- 金子明友 (2005a) 身体知の形成 (上巻), 明和出版:東京.
- 金子明友 (2005b) 身体知の形成 (下巻), 明和出版:東京.
- 日本体操協会 (1986) 研究部報, 56:2.
- 日本体操協会 (1990) 研究部報, 65:19.
- 渡辺良夫 (1993) 鞍馬両足系における跳び横移動に関する構造体系論的研究, *体操競技研究*, 1:43-52.
- 山下芳男 (1978) 鞍馬におけるマジヤール・シュピンドルについて—その課題性と形態的構造—, *岩手大学教育学部研究年報*, 38:197-204.